

中国社会科学学会 2026年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel:03-5841-3746, 大会専用E-mail:shabun.taikai@gmail.com

参加費（シンポジウム資料代）1,000円

2026年7月4日（土）自由論題研究報告

第Ⅰ会場：13:00～17:00 1番大教室

司会：佐川 英治（東京大学）

「移」・「属」から「関」への展開——漢・唐地方官府各部局の間のやりとり文書の変貌

……………王 雲菲（東京大学大学院生）

コメンテーター：小嶋 茂稔（東京学芸大学）

「陳渥書陀羅尼經幢」から見る10世紀半ばの山東半島と海域交流 ……………朴 周恩（東京大学）

コメンテーター：田熊 敬之（岩手大学）

宋代における寒山拾得について——民俗仏教の視点から ……………張 麗麗（大阪公立大学研究員）

コメンテーター：柳 幹康（東京大学）

慶元党禁と徽州地方士人——明嘉靖本『新安休寧汪溪金氏族譜』を手がかりに

……………李 靈均（学習院大学客員研究員）

コメンテーター：梅村 尚樹（東京大学）

『丙丁炯戒録』の成立とその思想史的位置——江戸後期の天人関係論において

……………廖 嘉祈（東京大学大学院研究生）

コメンテーター：水口 拓寿（武蔵大学）

第Ⅱ会場：13:00～17:00 2番大教室

司会：小野寺史郎（京都大学）

清代における海船管理の実態——名義貸しを中心として ……………田 兆心（東京大学大学院生）

コメンテーター：岸本 美緒（公益財団法人東洋文庫）

近代揚州の在地紳商層と都市景観の創出——徐園を中心に ……………洪 擎天（立教大学大学院生）

コメンテーター：吉澤誠一郎（東京大学）

1920年代左翼詩歌における「詩」への拘り——その連続性と変化の諸相 ……………田中 雄大（文教大学）

コメンテーター：下出 鉄男（東京女子大学）

「父の張愛玲」——『繭』から見た「近・現代中国文学」の構築 ……………楊 北辰（東京大学大学院生）

コメンテーター：鈴木 将久（東京大学）

ポスト文化大革命期における中国共産党の「四人組」解釈と「独裁」の独占

……………小出 瞬（明治大学大学院生）

コメンテーター：村田雄二郎（同志社大学）

会員総会：17:10～17:40 1番大教室

2026年7月5日（日）シンポジウム

キリスト教宣教師と中国との対話

(Interactions between Christian missionaries and China)

助成元：科研費基盤研究(C)「近世～近代中国におけるスコラ哲学的論理学の翻訳と作用」

1番大教室 10:00～16:30

企画・司会・趣旨説明：新居 洋子（東北大学）

午前の部：10:00～12:00

間文化的歴史をいかに叙述するか——「間（あいだ）性（In-Betweenness）」という技法

……………ニコラス・スタンダールト（北京大學／ルーヴァン・カトリック大学）

コメンテーター：井川 義次（筑波大学）

午後の部：13:30～16:00

在華イエズス会建築における文化的適応——世俗空間を中心に

……………ジョアネス・ホッシャ（成蹊大学／上智大学）

正教会における漢訳祈祷書試論 ……………畔柳 千明（新潟大学）

在華プロテスタント宣教師による日本伝道論：そのローマ・カトリック教会認識を中心に

……………土肥 歩（青山学院大学）

コメンテーター：中砂 明德（京都大学）

総合討論：16:00～16:30

*質疑応答通訳：蘇 哲誠（同志社大学）

◆自由論題報告 7月4日(土) 第I会場 13:00~17:00 1番大教室

◇「移」・「属」から「関」への展開——漢・唐地方官府各部局の間のやりとり文書の変貌

王 雲菲

〔報告要旨〕本報告は、新たに公表された秦漢簡牘史料を手がかりとして、漢唐期の地方官府における各部局間の往来文書を通時的に分析し、その変遷の脈絡ならびに要因を考察するものである。従来の研究においては、五胡期の「属」文書と唐代の「関」文書が主たる検討対象とされてきた。しかしながら、「属」文書の性格をめぐってはなお見解の分岐が存在しており、その起源や「属」から「関」への転換・取代の実態については、いまだ解明されるべき多くの課題が残されている。本報告では、まず秦・前漢前中期における、長吏の口頭指示と黙示的協調に依拠した列曹間の意思疎通という形式を出発点として論を進める。続いて、後漢から五胡期にかけて、長吏の裁可・授権の過程を明示する列曹間の平行公文としての性格を備えた「属」文書の成立とその運用、さらに唐代において「関」文書へと展開していく一連の過程を検討する。そのうえで、以上の変遷を、中国古代国家が基層地方行政を統制する論理、すなわち意思決定と授権の正当性を文書上で可視化し担保する枠組みが形成・精緻化されていく過程の一端として位置づけることを試みる。

〔報告者紹介〕王 雲菲(おう・うんひ)、1997年生。専攻は秦漢魏晋南北朝史、地方行政制度史。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程在学。日本学術振興会特別研究員DC2。主要論文「漢唐官文書中的婦女姓名書写」(『歴史教学』2021年第6期)、「両漢孫呉における「列曹言」文書と郡県行政意思決定過程について」(刊行予定)など。

◇「陳渥書陀羅尼經幢」から見る10世紀半ばの山東半島と海域交流

朴 周恩

〔報告要旨〕本報告では、941年に山東半島青州に立てられた経幢の内容を手掛かりに、10世紀半ばの山東半島をめぐる海域交流について考察する。9世紀半ばまでの山東半島をめぐる海域交流については、平盧節度使の押新羅渤海両蕃使兼任や、在唐新羅人の交易活動などが知られている。しかし、10世紀に入って五代王朝や高麗、契丹が成立する変化の中、山東半島を中心にした周辺地域との交流については断片的な事例が挙げられるのみであった。そのような中、陳渥書陀羅尼經幢には、当時の平盧節度使を指す言葉とともに、「両番通事」や「呉越鎮海軍討撃使」などの人物も登場し、山東半島と周辺地域との交流について知る手掛かりとして注目に値する。本報告ではこの経幢が立てられた背景について検討しながら、平盧節度使がそれまでの押新羅渤海両蕃使に代わり高麗と契丹に対する窓口として機能し、同時に呉越国との結びつきを強めた当時の交流の様子を明らかにする。

〔報告者紹介〕朴周恩(ぱく・じゅうん)、1992年生。専攻は唐末五代史・東アジア交流史。東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻アジア史専門分野修士課程修了、同大学院博士課程単位取得満期退学。現在は東京大学文学部東洋史学研究室教務補佐員。

◇宋代における寒山拾得について——民俗仏教の視点から

張 麗麗

〔報告要旨〕本報告は民俗仏教の視点から唐代の天台山国清寺に隠棲したとされる伝説上の「風狂」な詩僧寒山拾得の宋代特質を検討するものである。これまでの研究では、唐代史および唐代文学の研究で寒山拾得の事跡、寒山拾得の詩と詩集、ならびにそれらに対する注釈を論じるものが中心であり、日本側の受容状況に焦点を当てた研究も見られる。宋代以降における寒山拾得イメージの形成・流布、ならびに信仰の展開に関する研究は相対的に少ない。本報告は、まず地方志等の史料から、信仰の分布や信仰ルート、地域性を明らかにする。その次、図像関連の資料から宋代寒山拾得図の展開を見てみる。最後、『全宋詩』などにおける寒山拾得の関

連記事を整理し、信仰の担い手及び彼らの交遊活動が、宋代における寒山拾得像の変貌と広がりをもたらし、これを検討する。以上を踏まえ、当時の大衆文化と連関する民俗仏教信仰としての宋代寒山拾得の特質を提示する。

〔報告者紹介〕張麗麗（ちょう・れいれい）、1989年生まれ。専攻は宋代仏教社会史。大阪公立大学大学院文学研究科東洋史学専修博士後期課程単位修得満期退学。現在大阪公立大学人文学学際研究センター研究員。主要論文「宋代における泗州大聖信仰の展開」（『人文研究（大阪公立大学大学院文学研究科紀要）』第77号、2026年）、「宋代における布袋和尚信仰の展開」（『人文学学際研究（大阪公立大学大学院文学研究科人文学学際研究センター）』第1号、2026年）など。

◇慶元党禁と徽州地方士人——明嘉靖本『新安休寧汪溪金氏族譜』を手がかりに

李 靈均

〔報告要旨〕慶元の党禁に関しては、従来、朱熹およびその核心的門人に焦点が当てられてきた。近年、黄寬重氏が孫応時を取り上げ、士人個人の処世とネットワークから党禁の実態に迫ったが、朱子学が深く浸透した徽州において道学門人がいかなる境遇に置かれたかは、なお解明の余地がある。本報告は、明嘉靖三十二年（1553）刊本『新安休寧汪溪金氏族譜』を主たる史料として、党禁下の徽州における朱子門徒の実態を考察する。報告者はかつて同族譜の朱熹佚簡を考証しており、本報告ではさらに族譜中の墓表・墓碑・墓誌銘等に基づき、朱熹門人金朋説とその従兄金忠・金恕が同時に黜落した経緯を明らかにする。また、嘉定更化後も復職せず「杜門講学」したとする記載について、主体的な隠逸か仕途の阻断かを検討する。あわせて、南宋の人物伝記は政治環境に応じて叙述内容が調整されうるという黄寬重氏の指摘をふまえ、族譜における金氏の叙述を史料批判的に再検討したい。

〔報告者紹介〕李靈均（り・れいきん）、1992年生。専攻は宋代史。河北大学歴史学部卒、北京大学歴史学系一貫制博士課程修了、博士（歴史学）。現在、学習院大学客員研究員、国際日本文化研究センター共同研究員。主要論文「宋代任官制度中の零考問題」（『史学月刊』2022年第9期）、「南宋官員による官銜の書写について：「宜差」の追加を中心に」（『史滴』第42号、2020年）など。

◇『丙丁炯戒録』の成立とその思想史的位置——江戸後期の天人関係論において

廖 嘉祈

〔報告要旨〕本報告では、塩谷宕陰編『丙丁炯戒録』を取り上げ、江戸後期の天人関係論におけるその位置づけを考察する。南宋期に成立した「丙丁災異説」は、本来は為政者を律する思想であったが、日本では長らく「俗信」として受容されていた。しかし、幕末の内憂外患を背景に、宕陰は老中である水野忠邦の命を受け、国家の危機を戒め、為政者の恐懼修省を促す思想資源として同書を編纂した。

当時、西洋科学の普及により伝統的な天人相関論が揺らぐ中、宕陰は物理的法則を認めつつも、災異説を為政者を牽制するための「方便」と定義することで、相関論の有効性を維持しようとした。これに対し、大橋訥庵は「気」による天人の感応を擁護し、方便説を排して天人相関論の絶対性を維持しようとした。両者の議論は、天人相分論が台頭する時代において、知識人たちが天人相関論をいかに再構築しようとしたかを示す重要な座標軸である。

〔報告者紹介〕廖嘉祈（りょう・かき）、1995年生。専攻は近世日本思想史。北京大学中国語言文学系、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程を経て、同博士課程を単位取得満期退学。現在、武蔵高等学校中学校・埼玉大学・明星大学非常勤講師。主要論文「豊田天功『精忠新録』の編集過程—水戸学派の「振気」戦略をめぐる一」（『日本中国学会報』73、2021年）、「「除奸」と「殉難」の間—水戸学者・豊田天功と吉田松陰における楊継盛受容—」（『日本思想史学』54、2022年）など。

◆自由論題報告 7月4日(土) 第Ⅱ会場 13:00~17:00 2番大教室

◇清代における海船管理の実態——名義貸しを中心として

田 兆心

〔報告要旨〕清代の海上活動には、政府の比較的厳密な管理制度と活発な密輸という一見すると矛盾している特徴がある。本報告は、条文としての制度と実態との間に生じた乖離から一步進めて、制度設計の合理性、個別細則の実行可能性、そして法令条文の適用に内在する柔軟性といった側面から、清代海船管理体系のどの部分が、いかなる要因によって、どの程度の乖離が生じたのかを明らかにすることを試みる。

第一部分では、実務を担った澳甲・牙行の役割を分析し、政策が如何に民衆の日常に浸透したかを解明する。第二部分では、船員交替に伴って広く行われた名義貸しに注目し、その実態と政府の対応を考察する。第三部分では、船の証明書の貸借・偽造事例を通して、船員だけでなく、船全体の「名義貸し」の性格を検討する。

〔報告者紹介〕田兆心(でん・ちょうしん)、1997年生。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学中。主要論文「近代江南市鎮的三重空間——以楓涇鎮為中心的討論」(『新亞学報』第37巻、2020年、趙思淵との共著)、「海上漂来的殖民者?——從1847年朝法“丁未事件”看近代東西接觸的一個側面」(『暨南史学』第27輯、2023年、路偉東との共著)など。

◇近代揚州の在地紳商層と都市景観の創出——徐園を中心に

洪 擎天

〔報告要旨〕本報告は、主に知識人の随筆や手記・案内記ならびに新聞記事を利用し、近代揚州の紳商層が伝統的生活様式を維持する中で、旅行ブームの到来により都市定義の主体性を喪失していく過程を考察するものである。まず、太平天国の乱後の経済衰退下における文人の生き方を分析し、当時の時代的課題を浮き彫りにする。次に、辛亥革命前後地方支配を維持した紳商層が、清代の様式を継承する交流空間として象徴的景観「徐園」を築造した目的を検証する。一方、交通網の整備と観光の大衆化により、揚州は上海経済圏の観光地として再編され、徐園は紳商層の専用拠点から幅広い層が訪れる大衆向けリゾート地へと変貌した。その結果、紳商層は景観への掌握を失い、1934年の風景委員会設立等の対策も後手に回ってしまう。こうした過程を通じ、文化的資本に依拠した都市再建の試みが、近代的消費社会の進展の中で主体性を失っていく動態を明らかにする。

〔報告者紹介〕洪擎天(こう・けいてん)、1994年生。専攻は近代中国社会史、都市史。蘭州大学民族学系卒。現在立教大学大学院文学研究科博士後期課程在学。主に近代移行期における伝統都市の変容を中心に研究を行っている。

◇1920年代左翼詩歌における「詩」への拘り——その連続性と変化の諸相

田中 雄大

〔報告要旨〕本報告の目的は、郭沫若・蔣光慈・殷夫から中国詩歌会に至るまでの新詩実践について、彼らがなぜ「詩」という文体に拘ったのかという点に着目することで、1920年代以降に展開されたいわゆる「左翼詩歌」が如何なる新詩観の継承と変遷のうえに成り立っていたのかを示すことにある。現行の文学史叙述において、中国詩歌会の詩作は、革命文学の先駆者である郭沫若や蔣光慈のロマン主義ないし唯心論的傾向を克服した成果として位置づけられることが多いが、本報告ではそのような「克服」の大前提として「新詩が詩である所以」に関する論理的な連続性が存在することを、主に『新詩歌』に掲載された諸テクストを分析することで明らかにする。また彼らが「革命」を文学の題材とするにあたってなぜ「詩」という文体を用いたのかについても、大我や集団主義といった従来の見解とは異なる知見の提出を試みる。

〔報告者紹介〕 田中雄大（たなか・ゆうた）、1993年生。専攻は中国語近現代文学。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。現在、文教大学文学部専任講師。主要論文「雑誌『現代』の肌理——同誌掲載詩と穆時英小説の詩的な文体」（『野草』第114号、2025年）、「蔣光慈の新詩観」（『言語と文化』第38号、2026年）など。

◇「父の張愛玲」——『繭』から見た「近・現代中国文学」の構築

楊 北辰

〔報告要旨〕 「80後作家」と呼ばれてきた張悦然は、文化大革命期の殺人事件を紐解いた意欲作『繭』（2016年）によって「成長した」と評価されている。本研究は、『繭』と張愛玲文学との間テキスト性に着目し、小説内外で進行している「近現代中国文学」の重層的構築を考察する。まず、本作を貫く「性と愛」の弁証法を手がかりに、小説が孕む歴史を葬ろうとする脱政治的志向を検討する。その媒介は張愛玲へのオマージュであるとすれば、再び後者を「中国近代文学史」に書き込んだ父、およびその遺志を引き継ぐ娘は、失われた文学＝近代性＝80年代という現代中国史観を露呈させている。しかし、同様に「父の張愛玲」を描いた朱天文の作品との親近性を見出すことで、21世紀初頭において「華語語系文学」がいかにかポストモダン的な中国想像を育んでいるかが伺える。最後に、『繭』というテキストの「越境」を通じて、世界文学市場によるナショナル文学の再生産を問題視したい。

〔報告者紹介〕 楊北辰（よう・ほくしん）、1998年生。専攻は比較文学、文学理論。オックスフォード大学大学院比較文学と翻訳研究修士課程修了。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。書評「Victoria Young, *Translation and the Borders of Contemporary Japanese Literature: Inciting Difference*」（『れにくさ』16、2026年）など。

◇ポスト文化大革命期における中国共産党の「四人組」解釈と「独裁」の独占

小出 瞬

〔報告要旨〕 本報告は、ポスト文革期（1977～78年）の中国共産党による「四人組」解釈を、「プロレタリアート独裁」理論の再編という視角から分析する。中心史料として、党内イデオログの胡喬木・鄧力群らが起草した1978年5月の「国務院財貿小組理論組」論文を取り上げ、「四人組」一派の諸論文との比較検討を行った。その結果、党内イデオログは社会主義商品生産論を軸に「四人組」一派を「主観主義」と規定したが、その解釈は原文の恣意的引用に依拠した一面的理解であったことが判明した。さらに、彼らは「主観主義」に対置する形で「客観的な経済法則」という概念を導入し、価値中立を装った「客観」や「法則」の認定権を党上層部に集中させることで、労農大衆を排除した党の「独裁」の正当化を理論的に支えた。

〔報告者紹介〕 小出瞬（こいで・しゅん）、1997年生。専攻は中国共産党史・中国外交史。明治大学政治経済学部卒。現在同大学院教養デザイン研究科博士後期課程在学。主要論文「文化大革命末期における中国共産党の理論問題に関する研究——「プロレタリアート独裁のもとでの継続革命」理論をめぐる」（『中国研究月報』78（6）、2024年）、「文化大革命末期における中国共産党の「資本家のいないブルジョア国家」論に関する研究」（『中国研究論叢』24、2025年）、「華国鋒の文革理論再構築に関する研究」（『史学雑誌』135（1）、2026年）など。

シンポジウム

キリスト教宣教師と中国との対話

(Interactions between Christian missionaries and China)

2026年7月5日(日) 10:00~16:30 1番大教室

企画の趣旨

16世紀以降、多くのキリスト教宣教師たちが海や国境を越え、中国大陸に到達した。「宣教」という言葉は、宣教する側の主体的行為という印象を抱かせるが、実際には彼らはその場その場の言葉や身振り、感覚や感情のやり取りといった時間性や身体性をともなう相互作用のなかで生存していた。宣教方針としての「適応」も同じである。「適応」は一般的にはイエズス会の方針として知られるが、大なり小なり、他のカトリック内外の宣教師にも共通する。それは宣教戦略という一方的な主体的行為としての側面ばかりではなく、ときには皇帝や士大夫からの示唆や好意、反発や無関心、また変動する政治や社会への対応を迫られるなかで苦心して編み出されるものでもあった。ただしそのような場合もまた、単に受動的であったのではなく、しばしば自らと中国との対話のなかに方途を見出した。そしてそのような対話は、ときには宣教師自身を変容させ、新たな「中国」像を生み出すこともあったのである。

たとえばイエズス会宣教師アミオ (Jean Joseph Marie Amiot) は、自分が披露した最新の西洋音楽が現場の士大夫たちの心はおろか、耳にも訴えないことにショックを受け、「音楽を最も深い黙想 (meditations) の対象とした」儒教経書に対する研究を決意する。meditation は一般的には沈思黙考などと訳される普通の名詞だが、じつはイエズス会にとっては霊的修行法「靈操」の根幹をなす重要概念である。ゆえに、これは単に自らの側の話を場当たりに持ち込んでみたというよりも、士大夫および経書自体との対話のなかでこの語自体のイメージを拡充、変容させたというほうが正しい。

本シンポジウムはより広い視野にたち、4人の研究者による幅広い報告を通して、キリスト教宣教師と中国との対話のなかで何が呼び起こされ、何が変容し、生み出されたのかについて考えてみたい。なお本シンポジウムは科研費基盤研究(C)「近世～近代中国におけるスコラ哲学的論理学の翻訳と作用」(研究代表者：新居洋子)の助成により実施される。

報告要旨

間文化的歴史をいかに叙述するか——「間(あいだ)性(In-Betweenness)」という技法

(Writing Intercultural History: The Art of In-Betweenness)

ニコラス・スタンダールト (北京大学/ルーヴァン・カトリック大学)

(日本語訳：新居 洋子)

歴史家にとって「時間」「空間」「人間」という概念は重要だが、異なる文化と文化の間(間文化)の歴史を書く場合にはより重要である。中国語でも日本語でも、これらの概念にはみな「間」が含まれているのだが、その意味するものとは一体何なのか？そしてそれは歴史を書くにあたって新たな視角を獲得するのにどのように役立つのか？本講演では、17～18世紀の中国とヨーロッパとの接触を題材とし、また中国、日本そ

してヨーロッパの思想家を参照することを通して、間文化的歴史を叙述することにおける「間 (In-between)」という概念の重要性について試論を示したい。

「間 (あいだ) 性 (in-betweenness)」に基づく歴史研究の根幹は、自己と他者との出会いにある。両者の間の創造的な場において相互作用が起こり、そこに新たな出来事が生じる。こうした出会いによってもたらされた物語は、テキストやイメージ、モノや建築物、またより抽象的な次元では儀礼やコミュニティ、社会的ネットワーク、観念や思考システムといった様々な文化的創造物によって表現される。これらは出会いの際に起こる相互作用によって生成されるゆえに間文化的である。歴史叙述において、これらの間文化的創造物は史料の源泉であり、また歴史研究および調査の目的でもある。これらによって、異なる文化に属する者同士の原初的な出会い、言い換えれば「間 (あいだ) 性」を捉え、そして両者の文化的アイデンティティが出会いを通していかに形作られていったのかが探究される。そしてその結果として、歴史家と文化的創造物のあいだにも相互作用が生じていくことになるのである。

在華イエズス会建築における文化的適応——世俗空間を中心に

ジョアネス・ホッシャ (成蹊大学／上智大学)

先行研究では、東アジアにおけるイエズス会の建築様式は「折衷的」あるいは「ハイブリッド」として理解されてきた。しかし、本発表では、このような物理的特徴に基づく様式理解にとどまらず、「建築適応」という新たな概念を理論的枠組みとして提示し、異文化環境における「空間的实践」の再編成として宣教建築を捉え直す。報告者はこれまで、宣教師らが教会内の宗教空間において西洋的要素を維持しつつ信仰の表象を強調していた一方で、日本の大名や中国の官僚における「南蛮人」というイメージを克服するため、客人を適切にもてなすべく、布教地における風俗習慣に則した接客空間をいかに設けたのかを検討してきた。その結果として、建築空間の二重構造は、宣教建築が単なる「混成」ではなく、宗教的空間と世俗的空間がそれぞれ意図的な文化交渉を経て形成されたものであることが明らかになった。これらの成果をもとに、本発表では、明末清初の中国におけるイエズス会の建築適応を主題とし、建築学・歴史学・思想史の方法論を統合することで、宣教師が当初の「野蛮な外来者」という立場から、次第に「洗練された接待主体」へと変容する過程において、現地の接客儀礼をいかに受容・再編成したのかを明らかにしたい。

正教会における漢訳祈祷書試論

畔柳 千明 (新潟大学)

正教会が最も重視するのは、信者が教会で奉神礼 (礼拝) に参加することである。伝道の結果信者となった人々が自らの言葉で祈ることができるため、翻訳は、信仰維持のために重要な事業であった。ロシア正教会の宣教師が築いた中国の聖堂では、19世紀から中国語での奉神礼を執り行っていたことが知られている。

正教会では、一般的に各地域言語への翻訳に寛容な傾向が見られる。一方で、奉神礼が古来同じかたちで継承されてきたことを重視する以上、翻訳は野放図ではなく、さまざまな障壁を乗り越えて行われた、と考えた方が良さそうだ。本発表では、宣教師がどう中国社会・文化と対話していたのか、正教会の視点から考えるにあたって、中国語による公祈祷のはじまりという点にこだわってみたい。

19世紀後半に作成された正教会の旧漢訳は、20世紀初頭に大幅に改訂される。このわずか20年ほどしか

用いられなかったと思しき正教会の漢訳祈祷書を、本発表では翻訳史に位置づけ、それに基づいて、正教会において、いつから、どこで、誰が中国語の祈りを奉げるようになったか考える予定である。

在華プロテスタント宣教師による日本伝道論：そのローマ・カトリック教会認識を中心に 土肥 歩（青山学院大学）

17世紀初頭から明治初期にかけて、日本国内ではキリシタン禁制が維持されてきた。しかし、内外からの激しい批判を受けた明治新政府は、1873年にキリシタン禁制の廃止（キリシタン高札の撤去）を決定した。これを契機として、日本におけるキリスト教（ローマ・カトリック教会及びプロテスタント諸教派）伝道は事実上解禁され、数多くの宣教師が到来した。上述の歴史的事実は近代日本の歴史における重要なテーマのひとつであり、多くの研究者はさまざまなアプローチをもちいて各種成果を公表してきた。ただし、本報告で着目したいのは、中国に滞在していたプロテスタント宣教師が日本伝道に関する各種言説を1850年代から展開していたという事実である。本報告では福州に滞在していたメソジスト監督教会宣教師（およびその周囲の宣教師）が展開した日本伝道に関する各種言説について分析を加える。そのうえで、プロテスタント宣教師たちが日本（およびアジア）におけるカトリックの伝道活動やその歴史をいかに認識していたのか、事実関係を紹介する。

〔登壇者紹介〕

◇ニコラス・スタンダールト (Nicolas Standaert)

北京大学客員教授、およびルーヴァン・カトリック大学（ベルギー）名誉教授、ベルギー王立科学芸術アカデミー会員。主な研究対象は17～18世紀中国とヨーロッパとの間における儀礼、視覚文化、歴史叙述、印刷文化をはじめとする文化接触。主要な著作は *The Chinese Gazette in European Sources: Joining the Global Public in the Early and Mid-Qing Dynasty* (2022); *The Intercultural Weaving of Historical Texts: Chinese and European Stories about Emperor Ku and His Concubines* (2016); *Chinese Voices in the Rites Controversy: Travelling Books, Community Networks, Intercultural Arguments* (2012); *The Interweaving of Rituals: Funerals in the Cultural Exchange between China and Europe* (2008); *An Illustrated Life of Christ Presented to the Chinese Emperor: The History of Jincheng shuxiang (1640)* (2007); *Yang Tingyun, Confucian and Christian in Late Ming China: His Life and Thought* (1988) など（以上、全て中国語訳あり）。またルーヴァンカトリック大学中国研究ユニットを中心とする中国キリスト教文献データベース（CCT-Database）構築を牽引している。

◇ジョアネス・ホッシャ (Joanes Rocha)

東京大学にて博士号（工学・建築史）を取得。成蹊大学アジア太平洋研究センター・ポスドク研究員、および上智大学外国語学部ポルトガル語学科非常勤講師、母校ブラジリア大学アジア研究センター研究員。また復旦大学文史研究院、中央研究院歴史語言研究所、および国家図書館漢学研究中心（台北）客員研究員として在外研究を行ってきた。主に近世の建築や空間を中心とした東西文化交流を研究対象としている。

Association for Asian Studies の ASPAC-Mori Prize において Best Paper in Asian Studies を受賞、博士論文はポルトガルのオリエンテ財団より Embaixador João de Deus Ramos 賞を受賞。現在、同研究を基にした単著の刊行を予定している。

◇畔柳 千明（くろやなぎ・ちあき）

新潟大学人文学部准教授。博士（東京大学、学術）。早稲田大学次席研究員（日本学術振興会特別研究員 PD）、東京大学・千葉大学非常勤講師などを経て現職。主に 17～20 世紀に至るロシア正教会の東アジア展開の歴史を研究している。本報告に関係する主な論文として、「聖典の正教化 『東教宗鑑』と清朝中国のキリスト教」『ロシア語ロシア文学研究』53 号、1-22 頁、2021 年がある。

◇土肥 歩（どい・あゆむ）

青山学院大学文学部准教授。博士（学術）。主要研究テーマは 19 世紀以降の中国南部におけるプロテスタント伝道や地域社会論で、近年では中国近現代における国際的な災害救援活動の実態についても分析を加えている。主な研究業績として『華南中国の近代とキリスト教』（東京大学出版会、2017 年）や「在華プロテスタント宣教師と災害救済：広西省を事例として」『華南研究』第 9 号、2023 年 12 月）などがある。

◇井川 義次（いがわ・よしつぐ）

1961 年東京生まれ。琉球大学文学部人間科学科教授を経て、現在、筑波大学人文社会科学部研究科哲学・思想教授。中国哲学専攻。主な論文に「十七世紀イエズス会士の『易』解釈——『中国の哲学者孔子』の「謙」卦をめぐる有神論性の主張」（日本中国学会『日本中国学会報』第 48 集、1996 年 10 月）（日本中国学会賞哲学部門受賞）、「フランス革命前夜ヨーロッパにおける『帝鑑図説』受容について」（『儒教思想と絵画』勉誠社、2022）、訳書に M・カルタンマルク『老子と道教』（共訳、2001 年、人文書院）などがある。

◇中砂 明德（なかすな・あきのり）

京都大学大学院文学研究科教授。近年では、イエズス会のグローバルな活動を示す会士の著作の分析に取り組んでいる。関連する最近の論文に「日本・エチオピア・中国—17 世紀前半のイエズス会公刊年報から見た宣教の位相」（『京都大学文学部研究紀要』64、2025）「イエズス会士アロンソ・デ・サンドバルが描く黒人の世界」（『同』65、2026）がある。

◇新居 洋子（にい・ようこ）

東北大学文学研究科・文学部准教授。東西思想交流史、翻訳の思想史。単著『イエズス会士と普遍の帝国』（2017 年）、共著『フランス・アカデミーの時代』（2026 年）など。